1.4. ウィーン便り（4）―― 国際原子力機関（ＩＡＥＡ）に勤めて：趣味生活編 (2001.8)――

日立事業所燃料サイクル部 小西俊雄

余暇を利用した趣味生活を中心にしてウィーンを振り返って見たい。

ウィーンは言うまでもなく音楽の都であり、葡萄酒の街である。今こそ、オーストリアは人口約 800 万の中小国級だが、政経宗芸学、あらゆる面で世界の中心であった旧ハプスブルク王朝以来の物心両面の資産は「効率主義」に偏りがちな我々には羨望を通り越して「脱帽」の感である。ウィーンはその首都として華やかな歴史をもつ。通りや広場に王族と芸術家の名を身辺に配して飽きない風土に、平和と心の豊かさを物より尊ぶ国民性を実感する。加えて、私の好きな山がある。ウィーンの森からヨーロッパアルプスに至る山々である。心を落ちつけてくれる美しくて緑豊かな山が至る処にある。５年居ても飽きない街、国である。

- ハイキングと山

これは私の最大の趣味といってよい。山へ行くようになったのは入社後数年経ってからだから晩稲の部類だ。ウィーンに着任する前は南アルプスを好んで歩いた。還暦に富士山を登ることにしてその前に他の 3000 ㍍峰を済ませようとしていた。あと聖岳と信州の御嶽山が残っていた。ウィーンに来ることになってこのシナリオは崩れたが、代わりに現地での山の楽しみが増えた。

国連内にはスポーツや芸術等多くの同好会がある。着任早々そのハイキングクラブに入会した。これは正解だった。現地のリーダーが近郊の美しいところへ案内してくれる。文化や歴史の背景を説明してくれる。健康維持に良い。言葉の勉強になる。知人が増える。私には良いこと尽くめだ。今では常連を超してクラブの顔に近い。山の事情が分ってくると単独でも行きたくなる。対象には事欠かない。なにしろヨーロッパアルプスが近いのだから。最近は、オーストリア山岳会にも入会して行き先の範囲を広げている。

日頃のハイキングは近場に限定される。ウィーンはヨーロッパアルプスが次第に高度を下げて平地になる東端に位置する。その最後がウィーンの森であり、したがって近くに余り高い山はない。中では私が勝手に「ウィーン南郊三山」と名づけた 2000 ㍍前後が高い部類である。中で最も高いのはずばり「雪山（シュネーベルク）」である。それでも、緯度が高いため、日本の 3000 ㍍近い実感である。６月、９月で雪に遭うこともある。ウィーンの森もこの「南郊三山」地域もよく出掛ける。ハイキングコースには適当な間隔でガーストハウスと称する店があって立派な食事を提供してくれる。それもちゃんとしたレストラン級である。

着任直後のウィーンからの最初の年賀状に「滞在中の私生活の目標はグロスグロックナー3798 ㍍登頂」と書いた。オーストリアの最高峰である。その機会は 1998 年にやってきた。その登頂記は勉強を兼ねて日英独の三編を書いた。仲間に好評だった。詳細を再録する余裕はないが、日本語版の末尾に記した次の文で私の感激を想像して欲しい。『オーストリアの山は日本の山より岩っぽく、高度感で約千㍍高い。したがって、3798 ㍍のグロスグロックナーは日本でなら 5000 ㍍近い槍が岳に登った様なもの。』

昨年は西暦 2000 年と、迎える 60 という年齢に因んで 4000 ㍍峰に挑んだ。スイスのモンテローザである。８月に 4634 ㍍の主峰、９月に 4554 ㍍の第三峰に立つことができた。この登頂記も読者に好評だった。「山」は 40 年来の恋人である。景色も勿論だが、歩きながらの瞑想が心を魅きつける。ウィーンに来て恋は新鮮味

を加えた。恋人と一緒にいると時を忘れるし、少し間があくと会いたくなる。恋が若さの源であり、節制、努力のエネルギーを与えてくれる。が一方で、恋に溺れてはいけないとも自戒する。日頃の健全な生活があって、時に恋人と会うのが良いのであって欲張ってはいけない、年齢相応の恋がある筈だと思っている。これからも恋は続くだろう。私の山靴も 30 年経って大分くたびれてきた。でも愛しい。日本に帰って登る富士山がこの山靴への供養かと考えている。

- 「書展」

こんな標題が出て私を知っている人の中には首を傾げる人もいるかも知れない。実はウィーンに着任する前に、「書」を習いに寺子屋に通っていた。着任に際し、師のないまま独りで続くかと不安もあったが、駄目元と文房四宝と共に畳 2 枚を持って出た。それが役立って 1999 年始めに、現地で「書展」を開くという機会に恵まれた。国連内同好会のアートクラブが協力してくれた。その「記録」の序言から抜粋する。

- 外国人と接する機会の中で、「外国人に説明できる日本の文化を知っている必要性」を感じていた。「先ず己を知る」である。そんな 10 年ほど前、ある経緯で会った人が契機になって「書」に手を付けた。いわゆる「五十の手習い」だった。実に 30 数年ぶりに手にする筆であった。この「書」が、国連に勤務することになって役立つことになった。
- 国連と言う性格上、当然ながら世界各国の職員がいる。人種博物館とでも言いたくなる様な多彩な言語、文化が身辺に溢れる環境である。とは言え、東洋の不死鳥「日本」への認識は決して高くない。何か個人のレベルでも文化交流の助けになるようなことはないか。
- そんなことを考えていた時、邦人職員のある人が展示会を企画していることを知り「書」も参加させて頂いた。しかし私だけでは心もとない。幸い心強い協力者を見つけることが出来た。日本での書友、布村麗泉さんに参加頂けることになったのである。

「書展」には職場の仲間や外部の知人も多く来てくれた。オープニングでの実演が好評で、その場の作品や展示作品を所望する人が現れた。展示作品の売り上げ金は国連を通して児童福祉の活動に寄付をした。この「書展」は大きなインパクトを私に残した。多くの職員（勿論外国人）の間に「小西は書家」との虚像を作ってしまったのである。以降、ハイキングクラブの仲間等からの作品所望が続いて随分恥じ入った。が、個人レベルでの日本文化紹介には有意義だったと自己評価している<詳細記録>。

(「書展」で自分の作品を背景に書友の布村麗泉さんと)

- トーストマスターズクラブ

これはアメリカで始まったパブリックスピーキングのための自己啓発組織である。必須ではないが原則英語である。私は昭和 52 年に東京で初めて参加した。人前での話し方、会議の進め方などを練習するいわゆるハフツーものである。教則本に則り、目線の使い方、身振り、抑揚のリズムなどに主眼を置いて七分程度の

スピーチを予め準備して仲間の前で話す。聞き手がそれにコメントする。これを、順を追って段階的に進めていく。ＩＡＥＡに来て、この経験が非常に役立った。

国連内同好会の中にもこのクラブがあることを知り加入した。私のスピーチは自分の体験を素材にしたものが多く、この稿で書いた登山、書道の他、地震と温泉、箸の使い方など日本文化の紹介もした。日本でも毎年全国スピーチ大会が開かれるが、ヨーロッパでは春秋の二回、全欧大会がある。私もウィーン地区代表として三度この全欧大会に出場した。残念ながら一度も入賞できなかったが、良い思い出である。日本には、東京他各地に約 30 余のクラブがある。関心ある人は顔を出してみると良い。きっと役に立つ。（写真、トーストマスターズクラブでのスピーチ練習風景）

- ドイツ語

これも趣味である。無しで済ませる気なら無しで済むし、日本に帰って特別役立つとも思えない。が、やるなら今が好機と思ってやっている。若い頃と違い進歩は遅い。聞いた単語が右から左へ抜けるのは始終、意味を調べて辞書を閉じたらその意味を忘れていたり、辞書を手にしたら調べるべき単語を忘れていたりすらした。それでも続けているおかげで少しは上達した。ウィーンに着いて最初に買った本がウィーンの森のガイドブックだった。当初は字引と首っ引きで真っ黒になったこの本が、最近は殆ど書き込みなしで読める。公務で役立つこともある。日常生活では、旧東欧の国で英語よりも通ずる人が多く助かった。ＩＡＥＡの語学教室では、生徒の勉強のためにそれぞれの履修言語での文集を定期的に発行している。私も良く投稿する。山の登頂記や、旅行記などが多い<ドイツ語編目次へ>。

- 旅行

その旅行だが、公務の機会にしばしの休暇を加えて歴史ある土地を訪ねる機会をもてたのは幸せだった。訪ねた土地は多く、それぞれで一編になるほどだが、特に印象に残る幾つかを紹介したい<その他の旅行記>。

エジプト。最初に訪れた 1997 年春、機上から見下ろしたナイル河扇状地に感激した。ＩＡＥＡに来て「水」の仕事に携わって間もない時期なだけに、河の周辺のみに緑があって人間生活が成り立っている様を実感した。地上では勿論、古代文明のスフインクスやピラミッドを訪ね、その建築方法や形状変化の歴史を知った。ギザのあの有名な正四面体のピラミッド（第二回、職場編後編）は建築学的にも安定な究極の構造だそうだが、その形になる前の階段状のピラミッド（写真 サッカーラの階段状のピラミッド）も訪ねた。何となく砂漠のど真ん中にあるように思い込んでいたこれらの王墓が、意外に街の郊外にあった。建築用の石材を上流の産地から運ぶのにナイル河の氾濫を利用したのだと知ってその理由が納得できた。その後、さらに南のルクソールを訪ねる機会もあった。そこで見たオベリスクは、本来は対であるべ

き内の一本で他の一本がパリの公園にあるものと知って歴史を垣間見た感じがした。そういえば、カイロの国立博物館で見ても不思議ではない歴史の証人をその昔大英博物館で多く見た。

中国。1999 年春に訪れた敦煌<詳細版>が忘れられない。その途中で訪ねた西安も、唐の古都長安であり見るものは多い。シルクロードの出発点である。私は碑林博物館で時間をとった。本でしか知らない顔真卿や懐素といった名筆家の字を碑の形であるが直接目にして感激した。そこで購入した拓本が今も目を楽しませてくれる。西安の日立事務所の人と会った後、敦煌に飛んだ。莫高窟の洞穴がお目当てである。奈良法隆寺の原点と称される飛天の壁画や玄奘法師が眼にした仏教芸術を自分も見るのだと近づくにつれて興奮が高まった。期待は裏切られなかった。莫高窟の洞穴は撮影禁止なので、その分網膜に残そうと真剣に見た。中でも 275 窟の弥勒菩薩が圧巻だった。柔らかな微笑み、なんぴとをも許す慈愛に満ちた顔は永遠の恋人だった。もう一度訪ねたいと思っている。

（エリョーラ第 16 窟のシヴァ神宮殿）

インド。2000 年春２月。会議のあったムンバイ（旧ボンベイ）から飛行機で２時間、壁画のアジャンタ、彫刻のエリョーラの遺跡を訪ねた。圧巻はエリョーラの第 16 窟だった。ヒマラヤにあると言われるシヴァ神の架空の宮殿を鑿とハンマーだけで一枚岩に再現したとされている。幅 60㍍、奥行き 90㍍、高さ 35㍍というこの芸術品をコンピューターも設計図もモデルもなくて 150 年に渡って彫り続け、如何に完成したのかと驚嘆した<詳細版>。

この他にも訪ねた土地は多い。チュニジアでは歴史上の戦争で有名なカルタゴ遺跡、アメリカではイエローストーン公園、モスコアのクレムリンやボリショイ劇場、そして 2000 年暮れには南極大陸のペンギンに会ってきた。私的な旅行でも思い出は多い。トルコのエフェソスにヘレニズム文化の遺跡を見、隣国チェコではメンデルが遺伝学法則を発見した修道院、ワルシャワのキュリー夫人生家、オーストリア国内では、推定年齢約 5100 年という氷漬け人間に出会った。

- スポーツ

ウィーン市民マラソンは５月頃開かれる。フルマラソンと 15 ㎞の二種目がある。何れも観光地らしい見所を通るコースなので走っていて楽しい。私は短い方に三度出場した。最初の 1996 年は４月の半ばで霙だった。シェーンブルン宮殿をスタートして都心の市庁舎広場までガイドブックに出てくるいくつもの建築物を見て気持良く走った。男女別、年齢層別に成績が新聞に載る。が、初日は 200 位、翌日は 400 位まで。私の記録では随分先だな、しかしその他大勢は今日にも一挙掲載かと新聞を買い続けた。一週間後に「1000 位まで、以後掲載打ち切り」とあって肩透かしを食った。二度目の出場はその二年後。晴天で気持良い。新婚旅行に来て今から走ります、と言うお熱い日本人カップルと同時にスタートした。そして三度目の今年 2001 年、スタートが国連ビルの前に変わった。暑い日で脱水症状に苦しんだ。

毎年大晦日には、一周約５㎞のリングシュトラーセ周回市民マラソンがある。これには良く出る。ある年、正式の背番号をつけた犬が飼い主と一緒に走っていた。どちらが伴走役だったのか。沿道、ゴール地点での歓声は「人一倍」高かった。後日の記録報告書には男女別、年齢層別に並んで「犬の部：参加総数１、第１

位＊＊＊、国籍オーストリア」と載っていた。（写真リングシュトラーセ周回マラソン）

親しい日本人の友人と球技十種競技というのをやった。きっかけはパーティ席上での冗談話だった。テニス・ボーリング・卓球・バスケット（フリースロー）・サッカー（ペナルティキック）と続いて、ゴルフをやることになった。相手は今までクラブを握った事がないと言う。そこに現れたのがゴルフ好きの日本人職員数名。臨時コーチ、ハンディキャップ査定委員、競技委員を買って出てくれた。練習ラウンドの結果でハンディを「正式に」査定して貰い、本番では見事この新人に破れて目出たし、目出たし。この他、ビリヤード、スコッシュ、ペタンクと候補種目があったが十種競技としては未完で終わった。楽しい思い出である。

冬のスキーもこの国では欠かせない。内陸国だけに雪質は素晴らしい。スロープは長いし、リフト類も完備していてしかも空いている。車で一時間も走ると格好のゲレンデがある。西のチロルやザルツブルクまで足を伸ばせばさらに良い。クロスカントリーも面白い。ウィーン日本人会の恒例行事になっているソフトボール大会やボーリング、歴代の国連大使が例外なく好きなゴルフの大会にも何度か参加した。根はアウトドア派なのである。サイクリング、インラインスケーティングにも誘われるが時間がなく見合わせている。

- これからのこと

年齢の所為か、ウィーン生活の所為か、趣味の範囲が広がってきている。良いことなのかと自分では考えている。自活で苦労した料理を少し真面目にやるか、帰国したら書も再開したい、篆刻や彫刻もやって見たい、など夢は膨らむ。もちろん恋人「山」「酒」とも末永く付き合いたい。